

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

### 【タイトル】

狩り人の（笑）魂

### 【作者名】

幻月

### 【あらすじ】

馬鹿ハンター イデアは、今日もドスジャギーにやられた。（完）

・・・からスタートします。笑い要素が多い小説。そして、死亡者が多いと批判の多い小説。

小説カキコ・にじファンより転載です。

この小説は、数人の国語の成績が悪い学生数名がリレーで書いています。なので、内容のズレ・誤字脱字・矛盾点が多いと思います。

## キャラ紹介

狩り人のユクモ魂のキャラ設定です。どうぞ

名前：イデア（男）

歳：16

武器：

防具：備考・父親はハンターだったが、ある龍の討伐に失敗し死亡した。

主人公イデアは父親を殺した龍の正体を追っている。  
現在、カラビナと主に狩りをしている。

名前：マリアヌ（女）

歳：20

HR：5

武器：オーダレイピア

防具：レイアSシリーズ

2つ名：閃光のマリアヌ

備考：かつてロックラックでハンターをしていたが

HR昇格試験のときにPTの1人が死亡してしまい

PTは解散されユクモの村にやってきた。

実力は若干落ちたものの“閃光”の名に恥じない実力はもっており、面倒見がよくイデアを気にかけている。

名前：カラビナ（男）

武器

歳：16

防具

備考：新しいハンターで、大剣使い。イデアより身長が若干低く基本的にソロで素材採取していた。しかしイデアとの出会いをきっかけ

けにPTを組むことに。

関西弁で話しており、責任感が人一倍ある。ツッコみは超一流、

レミリア（女）

HR5

武器：飛竜刀【楓】

防具：レウスS

2つ名：紅銀

備考：ドンドルマのギルドマスターに頼まれて、スラッシュアック  
スとこの辺のモンスターの調査にきた。白銀の名は、白い髪をしてお  
り冷静でありドンドルマでは白い防具をしてたかららしい。仲間思  
いは凄いが、毒舌。

一人で調査に着たのではなく、数人できている。現在は日数をずら  
してこちらに向っているらしい。

エイカ（女）

HR5

歳：18

武器：土砂笏【厳ノ音】

防具：ペッコSシリーズ

二つ名：戦律

備考：ロックラックでハンターをしていて腕前はトップクラスだっ  
た。第28回HR5昇格試験で突如現れたイビルジョーよって大切  
な仲間を失い、それを自分のせいだと思い長い間病院にいた。数年後  
精神が回復したエイカは凍土に表れたイビルジョー討伐戦に参加し  
た。

オヤジ

職業：加工屋のオヤジさん。数人の弟子を持っており、その腕は素  
晴らしいものだ。サブローはオヤジの息子らしい。老け顔を気にし  
ている。以前ロックラックの有名な工房組合のリーダーであったが

成功作品が出ず、破産し解散されている。

破産して浪人になったところを、新しくできたユクモの村長が雇った。

これから少しずつ増やしていきます。よろしくお願いします。

## プロローグ

空は赤い雲を覆っていて雷がたまに落ちて、とても強い風が吹いていた。足の力を抜けば飛ばされてしまっくらしいの暴風だった。ユクモ村とはかなりの距離のある土地 霊峰。

そんな中、一人のハンターが、嵐のなかで見たことのないモンスターの目の前に居る。

モンスターは、古龍。その存在は謎で、神と呼ぶ人もいるらしい。

この男は村でもかなりの腕を持っている双剣使いだった。結構前までは太刀を使っていたが、気がつけば双剣を使っていた。

男の名前はレイアス。ユクモ村のハンターだ。レイアスはその腕のよさで風のように素早く敵を狩猟することから「神風」と呼ばれている。両手には夜天連刃「黒翼」を構えていた。防具はナルガスだ。迅竜といわれているモンスターナルガクルガの素材を使った防具だ。見た目はが、身軽さによって回避の距離が伸びるのだ。武器もナルガクルガのブレード部分を多く使用している為切れ味も高く命中率もある。

しかし嵐をまとっている謎の竜の前では、どのように攻撃、回避をすればいいのかが全くわからない。

レイアスは村長の頼みによってこの場所に来たのだ。妻と息子一人を置いて。

だが、死闘の中、レイアスは若干諦めていた。

レイアスはモンスターの目を見ていった。

モンスターは白く大きな体をしていて風を体の周りにまとっていた。

次の瞬間モンスターは声を上げて空に高くあがった。

「!?!」

そしてモンスターは、口から凄じ勢いで水を地面に直線状に吐き出

した。そして数秒後音を立てて、地面から水が飛び出してきた。

「っっっ！」

レイアスは右肩を軽くかすった。かすっただけでこの威力なら絶対によけなければと頭で理解した。しかしモンスターは容赦なくもう一度同じ攻撃をしてきた。レイアスは頭で理解していても体が動かなかった。

スタミナ切れだ。

そしてレイアスは水のレーザーに当たった。そしてレイアスは、空高く舞い上がり、がけの下へと落ちていった。

一つの希望を子供に託して……。

## ザ・狩猟タイム

一人のハンターがこのユクモ村で狩りをし、生活をしていた。そのハンターの名はイデア。

父レイアスの跡を継ぎ、ハンターになった。腕のほうは・・・あれなのだが。

今はドスジャギイに連戦連敗しており、今回の11回目の挑戦も敗北に終わり、集会浴場でうなっていた。

「あゝもう!!何であんなにも勝てねえんだよー!!」

実はもうこれが定番である。ギルドによく来る人と村長はもはや毎日三食ご飯を食べることくらい当たり前前のごとのように毎日見ている。

「まあまあ、ハンター様。焦らずに私の方の依頼をこなしてみては?」  
「ごうやって声をかけてくれるのは村長である。ーこれも11回目だがー いつもごう言っているのにイデアは聞きはしないのだ。

「俺は父ちゃんくらいハンターにならないといけないんだ!なのにあんな鳥竜種にやれるなんて・・・あー!もう一回行ってくる!!」

「あ、ハンター様!」

「次は負けねえからなー!期待してるよー!」

その場にいた全員が思わずため息をこぼした。

そして、村に戻り1時間後現在連戦連敗中の学習力無しはつきりいって無能ハンター イデアは孤島行きのアプノトスの荷車に乗っていた。

「くそー!今度こそ狩って村のみんなをまかしてやる!」

このセリフをこの荷車の持ち主はなんと聞いたのだろうか・・・。

おそらく敗北の数だけ聞いているのだろう。

「そうすれば村長だってギルドのクエストを受けても文句を言うこと  
はないし！」

このセリフも何回目だろう・・・12回目か・・・。

などと荷車の持ち主（以下A）は思っていると、孤島の方角から他  
の荷車と出会った。

その荷車にはあの“陸の女王”と恐れられているリオレイアが  
眠っており縄で縛られていた。

その隣には装備からいって女性だと思われるハンターが乗ってい  
た。

「マリアンヌ・・・」

とイデアは叫んだ。

そう彼女は一年前までロックラックでハンターをしていて現在は  
ユクモ村に腰を落ち着かせているハンター マリアンヌだった。

またの名を“閃光”のマリアンヌである。

イデアは啞然した。“陸の女王”と恐れられているリオレイアを  
たった一人で捕獲してしまうなど、カナリの実力がないと、無理なの  
だ。

「おいイデア。今日もドスジャギイにポコポコにされてくるのか？」  
マリアンヌは上から目線でイデアの事を、バカにするかのように  
いった。

「ちがう！今日こそ、今回こそ一人でドスジャギイを狩猟すんだ！  
ポコポコになんかされないぜ！」

イデアが怒鳴り声に近い声でいうと、レイアSヘルムをとった。黄  
色っぽい髪の色をしていて、顔は綺麗だった。

「そうなの？てっきりMになったのかと勘違いしてしまった。えつと  
今回で10回目だっけ？少しは村長様の依頼でも受けてみれば？  
キノコ採取とか」

「ちがう・・・今回で12回目だ（グスン・・・）」

イデアは、素材収納クエストや、小型モンスター数匹の討伐しかつ  
やってない。そのストレスのせいなのか、2ヶ月ほど前からドスジャ



ギイばかり挑戦している。しかし連敗している。

「つぷ。ま…まあ がんばってね〜」

マリアンヌは笑いをこらえながら言ったが、イデアには普通に笑っている様に見えた。そもそもクエストに成功しなければ、ゼニが入らない。そのため食費などは、村長やマリアンヌが出してくれている。「あ…そつだ。今度手伝ってあげようか？ 今回も失敗したらだけど」

「よけいなお世話だ！ 今回こそ狩猟してやる！ 回復薬に回復薬グレートに、肉焼きセット！そして調合用にハチミツや薬草、シビレ罫だつて落とし穴だつてある。討伐が無理なら捕獲してやる！（どや！！」

イデアは準備なら完璧だと最後に言ったがマリアンヌは

「イデア…捕獲用麻醉玉は？」

「あ…もってくるのわすれた！」

痛いところを疲れた。

イデアは、頭を抑えて叫んだ。

「はあ…そんなんだと思つたわ。それじゃあ余つた捕獲玉6個あげるから、報酬からお金だしてね！」

そついつてマリアンヌは村へ、イデアはドスジャギイの所に向つた。

「このクエストの報酬少ないのに（グスン…）」

更に数時間後…

マリアンヌの応援(?)をうけて孤島にきたイデアは空に向かって大声で言い放つた。

「よし！絶対に勝つぞー！」

いきようようと拠点を出たイデアは何かが違うように感じた。拠点をだすべく近くにいるアプノトスが、イデアの方に向かって走ってきた。

「まずは肉を集めるか・・・ってぎゃああ!？」

アイデアは、アプノトスの足に潰された。幸い重傷まで負わなかった。

違和感は、モンスターがいつになく凶暴なのだ。アプノトスまで攻撃をしてくるほどに。

「?よくわかんねえけど、俺におびえてんのか? (ガクガク)」

アプノトスに不意打ちを受けたが、アプノトスの群を背中にある太刀 ユクモノ太刀で斬殺した。

が、テキトーに切りまくったせいで一番小さい固体は剥ぎ取ることができないくらいグロテスクな状態だった。

そして肉焼きセットを取り出して、こげ肉2、生焼け1、こんがり1を作り出した。

ハンターとしてありえないことではあるが、アイデアはドスジャギイのところへ向かった。

そして、森の中の空洞のようなところにそれはいた。

「きたか!ドスジャギイ!!」

紫に近い色の鱗や皮、立派な襟巻のようなものが特徴的な鳥竜種である。比較的にリオレイアなどよりは弱く、初心者レベルではある。しかし狡猾で仲間との連携もとれるため、厄介な相手なのは言うまでもない。

「ガァー!ガァー!ガアオアアアアー!」

ドスジャギイが声をあげ、こちらに向かってくる。そしてかみついてきた。

「うわっ!?!」

間一髪でかわす。そして無防備の首にユクモノ太刀をたたきつけた。そのまま体重を移動し、突き、斬り上げ、振り下ろす。そしてそのまま気刃斬りをしようとしたところで尻尾に叩かれ飛ばされた。そしてドスジャギイは別のエリアへ行った。弱ったのではないが。

「んっ!やし玉投げてないのに逃げるの早いな・・・。」

まだこのときは余裕があった。そして、ドスジャギイが逃げた理由

を歩きながら考えていた。

「(こやし玉じゃないし……。弱っていないし……。じゃあ強いヤツがきたのか……。?って強い=俺!!)」

背後からゆっくりと足音がきこえるが、イデアは気がついていない。

ドスンッ！

よつやく気がついて後ろを振り向いた。

「んだよ。うるせ……。って!?嘘だ……。る?」

最近、その存在が確認された種族。体表に固い鱗を持ち「竜」の系統であるようだが、前肢は翼などの痕跡が一切無い完全な「脚」として特化させている。

飛行しない二足歩行の獣竜種とも骨格的に差異が見られる。「獣」のように腹部を地より浮かせた四足歩行を行う骨格の種と推測されて、

牙を象徴としての 牙竜種のモンスター 【ジンオウガ】

オオカミに似た姿をした牙竜であり、【無双の狩人】と呼ばれている。

鉤爪は鋭く、四肢は強靱に発達しており、頭部には一本の角を持ち、背中にある雷電核は他のモンスターには見られない特徴だ。

「グルルル……」

イデアの実力は、ドスジャギイ以下。一方ジンオウガは【無双の狩り人】。リオレイアを捕獲しているマリアンヌでも手こずるあいてである。

「う……。うわああああ!!!」「グオオオオオオオオ!!!!!!」

二者の叫びは同時に洞窟に響く。

イデアはエリアを変えるため キャンプに戻るために走った。が、大型モンスターに追われているときは、妙にスタミナの消費が激しい。

スタミナが足りずに一度スピードを落としてしまったのがダメ

だった。ジンオウガの前足は空高く上がっており、アイデアを踏み潰す  
為に、下ろしていた。

## 乱入ハンター

”雷狼龍” ジンオウガ。

アイデアは村長が

「困りましたわ…最近”雷狼龍” ジンオウガが近くにいますわね…」  
とか誰かと話していた記憶がかすかにある。  
アイデアも少しだけなら知っている。

だが今は、上からジンオウガの前足が、降って来ている。

アイデアはいままでの狩りの中でも一番のピンチに襲われていた。

「(スタミナはまだあるな・・・ならっ !!)」

アイデアは、走っている勢いを利用して前にダイブした。ズザザアと、滑って露出している肘や膝の皮はむけたが、ジンオウガに潰されるよりマシだ。

当然ながら攻撃を避けたアイデアはビクビクとしてた。

とりあえず逃げるのは不可能と悟り、太刀を抜いてジンオウガに切りかかるうとした瞬間

「ウオオオオオオオ…!!!」

ジンオウガはとてつもなく大きな声を上げた。

バインドボイスだ。アイデアは数秒間体が全く動かなかった

その間にジンオウガはアイデアに向ってきた

「(ヤバイ…やられる!)」

ガキン !

固いものと固いものがぶつかったが聞こえた。

アイデアは顔を腕で隠していたが、その音で正面を見た。目の前には大剣でジンオウガの攻撃をガードしていた。

獣竜種のモンスターー ボルボロスの素材を使用したボロス装備だ。

ガード性能などがついていて、為ガードが出来る武器と相性がいい

大剣使いは、距離をとって大剣をしまった。そしてポーチからあるものをとりだした。

こやし玉だ。こやし玉は特定のモンスターが苦手とする臭いのついた玉を、モンスターにあててその臭いを取る為にモンスターは逃げるのだ。

こやし玉をジンオウガにあてて大剣使いは、イデアの手を引いて更に距離をとった。数秒後ジンオウガはドスジャギイの居た逆の方へ向へと逃げていった。

二人はエリアをとりあえず変えた。

「たすかったよ。ありがとっ」

大剣使いは、砥石を使い終わってから、ヘルムを外した。

「アホか！そんな装備でいったら武器折られて、体ボロボロになるのが落ちちゃでー」

大剣つかいは、赤い髪をしていた。慎重は若干イデアより大きく、態度はでかかった。

「す…すいません…」

イデアはいきなり怒鳴られて焦っていた。

「アンタ名は？」

大剣使いは、普通にきいてきた。怒鳴ったときとの声の差に、イデアはまたおどろいた。

「えっと…僕でふよね… イデアでしゅ。太刀つかいです。 アニヤタは？」

(噛んだっ！もうやだっ !!!)

「ワイか？ワイはカラビナや。あと、アンタ噛みすぎや。」

「スミマセン…」

こうして大剣使いカラビナとイデアは、和解した。

「イデアは何を狩猟するんや？ワイはブラブラしてただけやけど。」

「ドスジャギイを狩猟するつもりです。」

「ほなワイもてつただうで。ワイはほとんど手伝ってもらっているか

ら防具はコレでも、武器は…」

そうだ武器はバスターソード改だ。素材も簡単にそろつものばっかした。しかも特に大型モンスターなどを狩らなくて済むので、初心者はこちらを良く使う。

「よろしくお願いしますよ。」

こうして二人はドスジャギィ狩猟を再開した。

だが、イデアは一つ違和感を感じた。

「あれ？これってギルド内で許されるのか？」

## 天性の馬鹿々...

二人はドスジャギイを五分ほど探し、やっと見つけた。もうアイデアはだいぶ疲れている。

「やっと見つけた・・・」

「なんや、疲れてるんか？なさけないやつちやなあ。」

カラビナは全然平気らしい。なんとというかたくましい人だといデアは一人納得していた。まあこんなことを悠長に考えている暇はないのだが。

「グオアアアアア!!」

ドスジャギイが吠えた。

「来るで！きいつけえ！」

「あ、お、おう！任せとけ！」

そして、二十分ほどの攻防の末にいに弱らせることができた。実はアイデアはここまでできたのは初めてである。ついに初勝利になるとワクワクしているとドスジャギイのいる洞窟からすさまじい声が聞こえた。

ギアアアアアアアアアアア

「なんだあ!?!」

「さあな？またジンさん来たらあれやしはよ終わらせるで！」

そして、洞窟に入った二人がみたのはありえない、地獄のような光景だった。

「グウウウ・・・」

巨大な何かがドスジャギイを喰い殺していたのだ。ただその何かが放つ殺気は近寄るのも許さなかった。

「な・・・なんだよ・・・あれ・・・」

「わいもあんな竜知らん・・・あんな悪魔みたいなのはな・・・」



クエストは成功だったがアイデアはこの狩りの感想は恐怖のみだった。

しかし、もう一つ別の感想があった。

「あいつよだれたらしてるぞ?」

「あ…あほ!!!にげるでっ!!!」

「まてよ!!ハンターたるもの新たな出会いには、背を向けるな!!!」

「かっこええけど、かっこ悪いわっあああ!!!あんたアイデアとかいったな?もしかしてアイデアとかいて馬鹿と読むんちゃうのか?」

「よし、こげ肉を地面におくか…」

「もうええわ死ね。」

アイデアが否定不可能と悟った瞬間、黒い竜は視界から消えていた。二人がそろって疑問符を頭に思い浮かべると、地面に黒い影が大きくなるのが見えた。

「あ 死んだ」「そやな。短いハンター生活やった」

ニヤアゝ

「キタ (、、)!!!」

やってきたのはアイルー2匹と荷車だ。アイルー二匹に二人は投げ飛ばされ、荷車に乗ってアイルーは全力でエリアを変える為に走った。そのタイムなんと、0・3秒!!!

次の瞬間二人が立っていた場所に ドスンッ と巨音が響いた。

キャンプ ナウ。

「かえるか。」「そやな」

## 大食いのあいつ

クエストを終了させ現在ユクモ村行きのアプトスの荷車（A）にハンター イデア カラビナが乗っていた。

A「…何でハンターが二人もいるんだろう？ まあ護衛代わりには使えるか」

「しかしあいつはなにものや？ いくらボス級の中では弱いにしても一撃で……」

カラビナはさっきの黒い悪魔のようなモンスターが気になるようだ

「黒くて二本足で凶暴でドスジャギィを一噛みで倒すなんて聞いたことねえよ……」

イデアも気になっているようだ。

「ハンター様、それって1年前に発見され現在調査中のイビルジョーのことですかい？」

と聞いてきたのはこの荷車の持ち主Aだった……。

「いびるじょお？ カラビナ、聞いたことあるか？」

と、カラビナの方を向く

「わい知らんわ。おっさん教えてくれ。」

とAにお願いした

「分かりました。教えましょう。イビルジョーとは去年の第28回HR5への昇格試験のときです。」

と語りだした。それを2人は黙って聞いた。

「HR昇格試験を受けていた4人パーティーが発見したモンスターでたしか発見したハンターは……」  
「魔弾」のカルバドス、「騎士公」のコーネリア、「戦律」のエイカ、「閃光のマリアンヌ」なに！

説明の途中で声をあげたのはイデアだった。

「なんや？ 今良いとこやのに……」

とカラビナは不満そうな顔をする。

「そのマリアンヌがいるんだよ……今ユクモ村に……」

「なんやとー」

カラビナが声をあげる。

「なぞが多い奴だと思っただけ……」

とイデアは言う

「とりあえず話全部聞こつや。おっさん続けてくれ。」

その言葉の言つとおりによりにAは話を続ける

「その4人は最強クラスの腕前で将来を約束されているような方々だったそうです。しかし勝負を挑んだ結果とし”魔弾”のカルバドスは死亡し”戦律”のエイカは精神的ショックで入院し残った2人のうち”騎士公”のコーネリアはロックラックでハンターを続け、”閃光”のマリアンヌは村でハンターをすると良い消えていったそうです……」

「あのリオレイアを防具に埃ひとつ付けずに捕獲するマリアンヌが負けるなんて……」

とてもしんじられないという顔をイデアはしていた。

「ここで考えてもしかないんや。村に着いたらそのマリアンヌに聞いて見よつや。」

とカラビナが言う。

「ああ、そうだな……」

とイデアは短くそう答えた……

## 女心をえぐる馬鹿二人

数時間後にユクモ村についた二人は、精算をすませてきた。

しかしカラビナは、ギルド内で密漁ではないか？ と疑惑を立て付けられ、誤解を解くのに数十分の時間を使うハメになった。

「おわったで……。マリアンヌの所にいっつや。」

二人は集会所をでて、マリアンヌを探しにいった。

数分後加工屋の前にマリアンヌはリオレイアの素材を渡して、何かをつくってもらっているようだ。

「おお。アイデアじゃないか！ ん？もう一人は？」

マリアンヌの方が先に気付いたのか、あちらから話を掛けてきた。

「そつだアイデア！連敗記録は、更新されたのか？それとも一割のゼニをもってきたのか？」

マリアンヌはやはりバカにしているような言い方をしてアイデアにいった。アイデアはしつかりと一割の報酬を持ってきてふてくされてる表情で無言でわたした。

「ほう。狩れたのか。そちらの人が手伝ってくれたのか？」

「そつや！ワイが素材を採取していたらコイツがジンオンガに切りかかるつとしてたら、ジンオウガに……」

カラビナは、余計なことを全て話した。そしてカラビナはアイデアをヒジで突っついた。

「馬鹿かお前ら？」

この一言で二人が数分間フリーズしたことは言うまでも無い。

「(アイデア！イビルジョーのコトどないするんや?)」

「(ああ……今からきくよ……)」

アイデアは少しだけ困った表情をして、その固く閉ざされた口で勇気

を出してきいた。

「あの…マリアンヌ…ひとつきいていいひゃ？」

「囁んだ…。」

「ひゃ？なんだ？私に話せることなら何でも話すぞ」

マリアンヌは豪快な笑顔で笑いながら答えた。

「…じゃあ…黒くて大食いで、大型モンスターを食べるモンスターの  
ことなんだけど…」

「!!」

マリアンヌはその名前を聞いた瞬間先ほどの表情と一変した。

「アイツをみたのかイデア？」

イデアは小さく頷いて、狩りのコトを全てはなした。

「あと…マリアンヌってアイツと戦ったんだろ？どうだったんだよ  
？」

「話せば長くなる。しかしアイツにあってしまっただんならば話さなければ  
ばな…」これ以上の犠牲者はみたくないからな…」

マリアンヌは、話を聞きたびに少しずつ表情が変わっていった。

## ニヤルガVS最強四人VS謎の竜…

あれは…

「 去年のHR昇格試験の時だった。マリアン又は四人一組のPTで、腕がすごく周りからは「閃光の魔戦騎士」と呼ばれていた。魔弾”のカルバドス、”騎士公”のコーネリア、”戦律”のエイカ、”閃光のマリアン又の四人だった。皆それぞれの2つ名をもっていた。それは今でもそうだっただろう。生きていれば…

四人はHR5に上がる為に緊急クエストをうけていた。内容は、孤島のナルガクルガを狩猟するだけの内容だった。四人は順調に狩りを進めていった。ナルガクルガの尻尾の針、左ブレードを破壊していた。ナルガクルガは徐々に弱っていった。マリアン又はランス使い。コーネリアは片手剣使い。エイカは、狩猟笛使い。カルバドスはヘビーボウガン使いだ。皆かなりの経験を積んでいて一人でもそれなりの実力を持っているが、長年組んでいる四人は連携になると敵なしだった。

「よし…いけるぞー!」

「ウム…ナルガクルガもこの四人の前では無力だの…!」

エイカは狩猟笛をしまい、音爆弾をなげた。

ギヤアアア!!

ナルガクルガが怯んだ。そして次の瞬間から、目が赤く染まった。怒り状態になったのだ。そしてバインドボイスをして四人が数秒間動けない間、ナルガクルガはコーネリアに飛び掛った。

「えっ!?わ…わたしい?」

コーネリアは頭の中が、真っ白になっていた。

「っちー!」

カルバドスはヘビーボウガンを構え、通常弾LV3をはなった。通常弾LV3はナルガクルガの頭に当たり、ナルガクルガが声を上げてひるんだ。

「あ…ありがとう」

「礼はいらん！まずは「コイツを狩るぞ！」

カルバドスはこの四人の中でも一番の実力を持っていた。そしてリーダー的存在だった。

ナルガクルガが足を引きずっていた。もうソロソロ捕獲が出来るタイミングだ。ナルガクルガは空に飛んでいき、エリアを変えた。数分間四人は砥石を使ったり、こんがり肉を食べたり、調合したりしてた。ナルガクルガを追おうとした瞬間

グオオオオオオオ  
!!!!

!? 四人は聞き覚えのない泣き声に戸惑った。

「な…なんだいまのは？」

カルバドスは、周りを見渡した。先ほどまでそんな声をしたモンスターなど見てはいないからだ。

「とりあえず行くぞー！」

マリアンヌが立ち上がって、声の聞こえたほうへとむかった。

声のした方へと向うと四人は体が動かなかった。

ナルガクルガは見たこともない黒い竜に捕食されていたのだ。ナルガクルガは全く動かなかった。そして黒い竜は満腹になったのか、立ち上がって咆哮をあげた。遠くにいた四人はバインドボイスによって、体が動かないのではなく、恐怖によって体が動かなかったのだった。そして黒い竜は四人のほうをチラリと見た。存在がばれてしまったのだ。黒い竜は、ゆっくりとこちらを向き、四人は恐怖に耐えながら武器をとりだした。



## 力無きもの

グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!」

黒い竜はまるで地の底から聞こえる怨念の塊のような声。いや、表  
現では音の方があつていようなバインドボイスを放った。それは、  
恐怖を増大させ、絶対的な強者、肉食竜を前にした草食竜のような気  
分にさせ、戦意を根こそぎ刈り取っていった。

四人は全員強い。しかし未知のモンスターが目の前におり、そして  
品詞寸前だったとはいえ、大型モンスターの中での強い方のナルガク  
ルガを殺すモンスターの前ではその力が何処まで通用するのは全  
くわからない。いや、結果は見えている。【死】だ。

「くっ……！逃げるぞ！目的は果たした！コイツの相手する意味も理  
由もない!!」

カルバドスがそう言い、皆意見も言わずに逃げ出した。その瞬間、  
黒い竜の巨体が跳んだ。その先にはエリカがいた。

「え……？」

エリカは自分でも驚くほどに落ち着いていた。ただ唯一思ったの  
は「死んだ」ただそれだけだった。

ドスウウン……

鈍く、重い音が響いた。そのときエリカは目を疑った。自分のいる  
はずの位置、竜の足元にはカルバドスがいた。

「逃げろ！逃げてコイツのことをギルドに伝えるんだ！」

黒い竜はおもむろにカルバドスの腕を一噛みすると防具ごと食い  
契った。

ぐあああああああ!!!!

エイカとコーネリアが助けに行こうとした瞬間、マリアンヌが二人

を引つ張り小さく言った。

「逃げるぞ。」

マリアン又は振り向かず二人の反発も聞かずにその場を去った。

二人が後ろを向いてカルバドスを見た瞬間、カルバドスはほっとしたようにポーチに手を当てていた。

マリアン又は必死に2人を引つ張り気がつけばベースキャンプにいた……。

「なぜだ！なぜ彼を見捨てたのだ！」

コーネリア激昂していた。

「そうよ！彼はまだ生きているのよ！」

エイカも同じようだ

「2人とも……現実を見て……カルバドスは……”魔弾”の

カルバドスは私達に逃げろと遣し死んだのよ……。」

「シンダ？……そんな……しんだ？……死んだ？カルバドスが……？

そんな……そんな……私たちのせい？いや、私のせいなの？

ウソダ。ウソダ。ウソダ。ウソダ。ウソダウソダ。ウソダ。ウソダ

ウソダ。ウソダ。ウソダウソダ。ウソダ。ウソダウソダ。ウソダ

ウソダウソダ。ウソダ。ウソダウソダ。ウソダ。ウソダ……いやあ

ああああああああああ

「エ、エイカ！」

!!!!!!!

発狂した。

コーネリアはそう叫んだがすでに気絶していた。

「とりあえず荷車に乗りましょー」

と言いコーネリアとマリアンでエイカを荷車に乗せロッククラックに向かった。多くのモンスターの叫び声を背に……。

## 弟子にバツコ〜ン!!

「コレだけさ… カルバドスは生きていたかもしれない…しかしアイツが最後に願ったことは「逃げる」それを信じただけだ。そしてギルドに報告した私とコーネリアは、真実を知った。それはイビルジョーという名と過去に起した事件だ。イビルジョーはたった一匹で一種のモンスターを絶滅においやったらしい。そしてもう一つ…」

「…」  
二人は全く口が開かなかった。あのまま戦闘してたらどうなったのか…二つ名を持つハンターですら死んでしまった黒竜イビルジョーに挑んだらどうなったか…

「イビルジョーは私らがギルドに報告してから特別に隊を作り、討伐に向った。しかしイビルジョーは私達が向ったら既に息がなかった。イビルジョーの正面にはカルバドスが倒れていた。カルバドスも息がなかったがな…。左腕がないのにあいつは一人でイビルジョーを討伐してた…そしてアイツの武器は使いようがないくらいポロポロだった。そして防具の裏に最後のメッセージがあった。「最高の友とずっと…」」

マリアン又は最後にメッセージを言ったあと話の続きは話さなかった。アイデアとカラビナは、こんな辛い事を話してくれたマリアン又は無言で頭を下げた。すると…

「二人とも…今度私と一緒に狩りに行かないか？過去の事を思い出したらなつかしくて… 無理はいわない。駄目なら結構だが。」

アイデアとカラビナはいきなりの言葉に戸惑った。アイデアはHR1、カラビナはHR2だが、マリアン又はHR5。その差は歴然だった。

「別に俺らはいいけど…俺らきつと足引つ張るぞ?」

イデアは当たり前のように答えた。もちろんカラビナも同意した。ドスジャギイで苦戦してる二人と、上位のリオレイアをほぼ無傷で倒せるマリアンヌ、足を引つ張るのは確実だ。

「大丈夫だ。私が師匠として二人を一人前にする。それが私に出来ることだ。」

「えっ? 今なんつていったの?」

「だから私が師匠になって二人を一人前にするんだよ。」

マリアンヌは笑いながらくいつた。弟子をとることは、言葉以上に難しい。関係もかわる。そういった様々な事がありえるなかでマリアンヌは言ったのだ。

「いやならば結構だが。」

二人はお互いに目を合わせて頷いた。

「お願いするよ。」

「ワイからも頼むわ。」

するとマリアンヌは笑って

ガンーゴッソッ!!

「っっっ!!?」

「なにするんや?!?」

二人はいきなり頭上にグーが飛んできてビックリした

「あたりまえだろ? 同意した瞬間から、私とお前らの関係はかわったんだ。」

当たり前のようになぐった

「それじゃあお前らの實力を見る為に手始めに、ドスファンゴをインナーでおしてもらうぞー！回避のタイミングが重要だぞー！それから罾の使用はきんしだからな。それじゃ明日の朝から行くから準備しろよ。明日の朝確認するからな。」

そういつとマリアンヌは少し嬉しそうに自分の家の方向へと向っていった。アイデアとカラビナも嬉しそうに家に向った。

その一方加工屋のオヤジさんは…

「(弟子をもつたら関係もかわるか…よし！)サブロー！ちょっとこい!!!」

すごい汗をかいたサブローが「ハイハイ」と声をあげながら向ってきた

「ハイは一回だ！ばかやるー!!」

そして一発顔をストレートで殴った

サブローは、その日、鼻血が止まらなかった。

「(なんで俺!?) (泣) (泣)」

## ハローレミィー

そんなこんなでインナーでドスファンゴを狩ることになった無能君イデアとカラビナは次の日の狩りに備えて二人で準備を始めた。

「明日は余裕だな！あんな猪俺にかかれば一捻りだぜ！」

「逆や逆！あんたみたいなアホはあの猪にかかればイチコロやで！」

「ひびい・・・」

カラビナのツッコミという心のナイフで一突きされたイデアは、だいぶへこむ。カラビナは正しいが。100%カラビナは正しいが。

「えっと・・・回復薬にグレート、それから罌と麻酔玉。あと砥石かな。」

「わいは硬化薬グレートとこんがり肉ももってくで？あんたはいらんの？」

「へーきへーき！しょせんは猪だし！俺様がズバズバつと狩ってやるぜ！」

「このあとの狩りでイデアはカラビナの提案に従えばよかったと後悔することになった・・・」



「いつは、ジンオウガだ。」

「な・・・何だこいつ？って!? この前孤島に居た奴じゃねえか!! まあ  
いいついでに狩ってやる!」

イデアはそのモンスターにかけ寄った。

「うらああああああああ!!」

『ガキーン』

太刀が弾かれた。

「くっ、」

その牙竜はイデアに向けてその強靱な前足を降り下ろした。

「死ぬ。」

イデアはそう確信した。

その時、目の前に人影が見えたと思うや否や、後ろに投げられた。

「ぐっ」

「彼女」はイデアを投げ、背中に背負った細身の刀を抜いた。

「あれは、太刀?」

イデアが疑問に思ったのは、その太刀筋があまりになめらかに牙竜  
を切り裂いていたからだ。

やがて彼女は牙竜をくまなく撃退した。

そして、イデアのほうへ歩みより、

「貴様、そんな格好でジンオウガを倒せると思っているのか!」

「うっせ糞アマ!!!」

「口悪いな、まあ、生きてて良かったな。」

ジジジッ

「何の音だ?って何でアンタタイプしてるん……………」



バツコッ  
ン!!!!!!

くアイデアは力つきました。く

キャンプに戻ると、さっきであった女性が居た。うん。美人だ。

「あ・あの、あなたは？ガクガク」

アイデアが聞くと、

「私は、レミリアだ。」

と、答えた。

「普通の名前ですね。」

「次は大タルで殺るぞ？」

「笑顔も素敵ですね。」

ここにアイデアの真のハンターライフが始まるはずだったの  
に。。。

## カクカクシカジカ 省略説明。

アイデアが落ちたのを聴いて、カラビナがキャンプに戻ってきた。

「レミリア・・・？聴いた事あるで。

「どうせ知ったかだろ？」

右ストレートが顔面に炸裂。

〜数秒後〜

「あっ・・・思い出したでー！」

とカラビナが叫んだ

「どうしたんだカラビナ？」

アイデアは少し耳を塞ぎながら質問した。

「レミリアはん、あんた“白銀”のレミリアか？」

とカラビナがレミリアに質問した。

「ええ、そうよ。」

と素っ気なくレミリアは答えた

「なあ、白銀ってなんだ？」

無知無能の称号を持つハンター　アイデアはカラビナに質問した。

「アイデア・・・そんなことも知らんの？白銀ていうのは2つ名でエミリアはんはあの、英雄でもあるんやでー！」

カラビナは少し興奮ぎみそう言った。

「英雄なんだそれ？」

無知無能ハンターアイデアは疑問に思ったようだ。

「え・・・じゃあジャンボ村の英雄　キオは・・・？」

とカラビナがアイデアにきく。

「誰だそれ？知り合いか？」

ダメだこいつなんとかしないと・・・と思ったカラビナは説明した。「英雄てのはシュレイド地方のセクメーア砂漠に生息するモンスターモノブ羅斯を狩ったハンターのことを言うんや。その中でも優秀なのがさつき言ったキオってハンターや。そのキオにも武器は違えど並ぶ冷静さや強さを持つとるんがこのレミリアはんってわけや・・・分かったか？」

カラビナは若干息を荒くしながらそう言った。

「ああ、大体は・・・。」

アイデアは半分くらいは分かったようだ。

「話は終わったか？お前たちに頼みがある。私をユクモ村に連れてってはくれないか？」

と今まで黙っていたエミリアがそう言った。

「ユクモ村に？なにしに行くんだ？」

とアイデアが言った。

「ドンドルマのギルドマスターにスラッシュアックスとこの地方のモンスターの調査を頼まれてな。それでこの地方までやって来たんだ。」

とエミリアは答えた。

「そっかじゃあ行くっつ。」

とアイデアが言い、3人はユクモ村に向かった・・・・・・・・・・報酬？そんなものは無い。

ユクモ村に三人が着くと・・・

ガッン！ごっん！！

アイデアとカラビナの頭にグーが炸裂した

「おいードスファンゴ討伐はどっした？」

「マリアンヌ…いや師匠実は…カクカクシカジカ…」

「ジンオウガ？たしか孤島でもお前らが見たって…まさか言い訳か？」

マリアンヌが二人に疑いの目を向けた。

「この無知無能の少年と、ほんの少し常識の通じる少年の二人のことは本当よ。だって私がジンオウガだっけ？ それを追い払ったんだもの…」

レミリアの事はマリアンヌも知っていた。レミアスの実力は、レウスSの防具一式と、飛竜刀【楓】を背中にもっていた。獄炎の龍鱗と素材を使うので古竜のテオテスカトルと戦っている証拠だ。

レミリアがユクモ村に来ることも知っていた。ギルドマスターに頼まれて、レミリアの事を案内するように命令されていた。

「どうも…私はマリアンヌだ。アタナの案内は私がする。宜しく。」  
マリアンヌが、左手をだすとレミアスも左手を出して固い握手をした。

村の入り口から少し歩くとマリアンヌが説明した。

「左側が道具屋だ。私達はここで品物をそろえている。そして右側が加工屋だ。お前が調べたいスラッシュアックスもここで作れる。加工屋の左上側の店が武器やだ。新米ハンターなどはここで武器や防具を買っていつている。加工屋の左下がオトモ武具やだ。オトモアイルーは知ってるな？その武器や防具を作ってくれるところだ。」

マリアンヌは誰にでも理解できるように細かく説明した。

「なるほど…解かりやすかった。お前とはいい仲になりそうだな、改めて宜しく頼むよ。では、酒でも飲みに行かないか？」

「おっ…!!!いいねえ〜。」

「いつら本当に女なのだろうか？」

二人はアイデアとカラビナを置いて集会場へと向った。アイデアとカラビナは加工屋に用があった。ドスジャギイーの素材が集まったの

だった。アイデアはオヤジの所に行って素材をわたした。

「よう！アイデアもようやくドスジャギイをたおせたのか？そいつはめでてえ！今回は料金をタダにしといてやる!!そのかわりしっかり働けよ？」

加工屋の近くに行くだけでも汗が凄いの熱い言葉で話されるとなおさら熱くなってしまった。防具は明日出来るらしいので今日は家に戻った。

カラビナはアイデアと一緒にアイデアの家に住んでいる。二人のほろが家を借りなくていいため節約出来るからだ。

「あのレミリアつ女ええ女だったな！顔も体も100点や！」

カラビナは少し興奮気味に大きな声で言った。

「あれで年がつかければ…イカンイカン！変な方向に走ってしまつた。ほな今日はねるわ。明日は、ゆっっくり休みうな！ほな！」

そういつてカラビナとアイデアは眠りについた。カラビナはよるに変な笑いをしながら…

アイデアは明日の初めて自力で作った防具を楽しみに…